朝夷巡嶋記

第五編　卷三

1 13
939
$23

門 仰 13
939

朝夷巡嶋記全傳第五編卷之三

東都　曲亭主人編輯

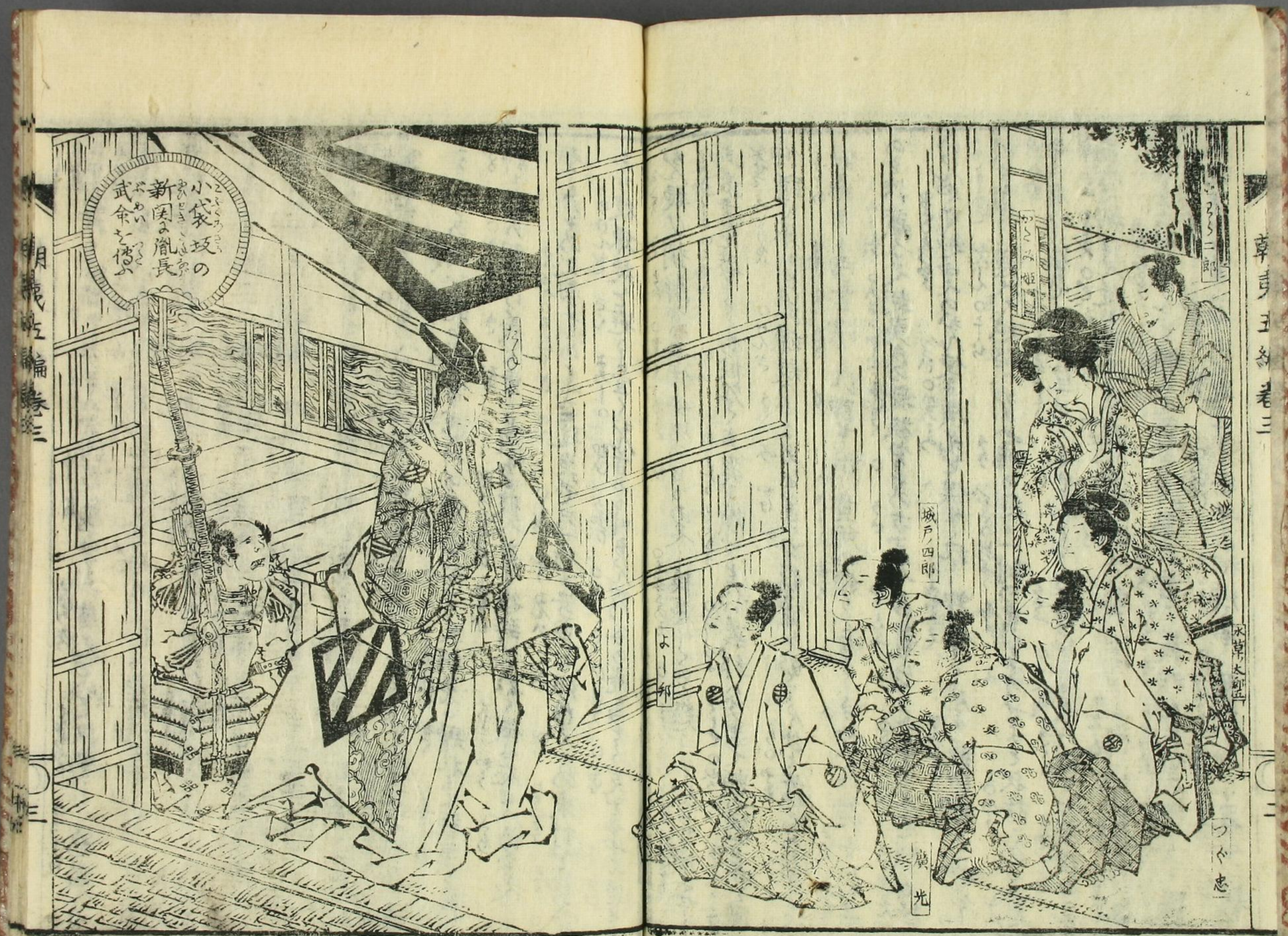
天保十五年二月
花房仙次郎氏寄贈

後輯第四十五

孝友の亡命人
新参の老實僕

吉見冠者義邦八曩ゟ荏柄平太亂長ゟ抑留せられて小袋坂の守屋ゟ夫婦主従纔ゟ七人日夜番卒ゟ守られて相禅慰さまぐもあれども西三日を送る程ゟ外面忍地難く只今御教書到来せしとて雑兵の罵る声遥ゟ聞えつる原来ゟ安房へ帰べし。と主従耳を側て聞く。安房の国の中ゟ時運を天ゟ任せ必死の覚期今ゟ驚く氣色ハ有り且て要拘人亂長ゟ武衣を解て礼服ゟ更ゟ一通の書翰を懐ゟ義邦の堂ゟ来る只今云云の旨下知あり。便是和殿夫婦ハ勿論亂長預りて荏柄の宿所ゟ召置べしと仰ら江三ゟ

四個の後者はその名ばかりなれば冠者と共の名搆へ但藁二郎とは異
苟且なる陸奥より後ひ来るものなり豫てこのゆえあるべき家臣は四人とぞ聞こえし
かれば藁二郎はその限りなるべし故郷へ帰去らんとも思ひこの地に在んとも彼思
隨意なるべし附き又もし下知あり朝夷三郎義秀ぐうの既に上聞に達せしかば則
渠を徴せん為に和田新左衛門尉常盛を越中國へ遣さるべし件の義秀は
果して義盛が子なれども常盛は弟なれども離別幼稚の時なれば送り面
忘れもつかんよりて江三廣光と常盛は俱に彼地へ遣せられ序を
もて義邦私に義秀へ一翰を贈りとも安否を問んなるべし
ものかあるべし評定衆より使はられさるこのすべ急せのあるべ常盛の朝
啓行せしめべきの准備肝要又多賀藏人は禁獄を免されて和田義盛に領
られと既にこの風聞あり藏人もかくの如し況冠者は犯せる罪のありとも
ちん疑ひ相解かれ本領安堵の日もあるべし後憑しくかと懇に告慰めて懐ませ
御教書を恭しくうけ披き声爽に讀ませれば義邦は実果て額つかる頭を擡
仰謹て承り仍て嫌疑の中に身を置べつる罪なくんぞ安堵ならずとて
假染ながら両三日淺からぬ物せれ貴所の領りとなりしかば冠者某
のを欲藏人を朝夷氏の親族なるその方ざまを召籠らるるも不思議の因縁
いかんぞ亦越中へのぢん使に廣光を俱せられく郷導せんず歓び譬さま物なり
彼義秀は恩人で越路へかかる鷹の翔に一封の書を寄せよと欲許させ恩
命に有かるべきを辱く望足りぬと答を削長くうち黙頭ぬべ
宿所へ相伴ん後者の揃ふ程もあれば物よく整へんと心づけて知らるべ番
卒ぞも皆退しく側に人のもとにぬ當下義邦は匿姫共倡に廣光懲
武詮昌之藁二郎ぞと近つけく密ぞ相議の事意外に知る恩命と疑ひ


小袋坂の
新関の亂長
武余之傳
城戸ノ四郎
よー郎
廣光
水草太郎

なるべ　案内させられ且朝夷へ書状を贈りと命せられいまろはるこしあのくいぐ
ゆんと向れて廣光頭を傾けその故詳はあるべかけれど冠者はさるあん智の
ゆれびを既よりも番卒は退れ況越路へ郷導は某を俱せらるは願ひ
ゆく犯幸ひ只朝夷の恩に彼稲向判五郎去歳より浅良并と小三が
朗へりこの折とりて彼処よりの犯く謝を述んするが主後の誠心を憐れ神仏の
冥助ふるいとの人が武詫声と細やか否然むるべ三を越路へ遣
さるはその面を認らざる常盛明の繹人は似う又朝夷は贈れそ冠者は書状と
許されは明友の義を重しと彼人遂は推辞とれく徴は応せんあるべし
あるはその文面は私の義を述のべ只一行は安否を紙ねくその東行を勧めて
あそ彼嫌疑を避るは宜くあん旨も叶あん窮谷の飛鳥はく友を求めく遷ると

より多賀明のう冠者の人を岩神へ使をあば朝夷明へ招ぜとも夜を日を
継くこの地はあつべしかくく彼人呂されく柳営は仕へ勉く禁錮を釋んや
譬ば尾羽を抜れし鳥の再び翼を生ぶる如し又それはあば助あ尤賀しく
真実もく容詫が義邦彰く領ねく四郎が考その理は稱りさあるべと
ゆくれが廣光昌之歓びく四郎はその才是似れば識量廣くそ先見あり言葉
違ぬ。それ吾黨の馬白眉狀と愛ことを稱るそ中は藁二郎は尚れ
ハ犯面色ふく人々の背はをり義邦うちとく傷は近つけ藁二郎れ
附驥の幸ありく父の本領三がひとつも返し賜るあるべかりの酬をせ
ばしはそくこのあ光爰ぬ俱くう甲斐まく今は繹みを画餅とあり如さ
汝は免れ己れの屋ど安くありうのを歓しあるあんとく奮里へ還れく晩稲も大
くく蘇果て田の草をとる比れば人は俟ち己れ命あり時あが復あるは

あるべきあるべきとのみ赤廣光ホも共に帰郷を勧れば藁二郎ハ空も果さぬを
ハ思ひもうけぬ下野の親もあく子ゑく妻も死ぬを誰か後れ悲死の身匹夫の
悲しさ後者の数に漏れくあるくよりあるべき冠者の先途を見果げて
故郷へ還るべくもあらで荏柄の第に置れぬ三三四の後者ゆく岩神へ倶しあ
陸奥へ出し時朝夷ぬに環會ぞ遂に冠者に見参して讐敵の軀を刺し
て難うあるべきの鴻恩ある人を身ひとつありとも彼地に遁く迎ぬれば
此度の彩に倶さしめと頻りに清て正ざるを義邦これをうち受く志ハ
あれども三二ぐ岩神へ赴くいるがあり遣るあるべきあを営中の沙汰ありに
その後者をも隷んとのぐ必人に疑さ冠者に死られぬ朝夷の為さ
冠との残ハいあく後ひくしをもかくも死絶く故郷へ還るまぬと赤と諭ぬ
廣光徒忠心も文武拙も昌之も共倍に利害を説くあるよりかへり去れば藁二郎ハ

嘆息して有るべカ及ばぬるべしよや望を遂ずとも某ハ今ぬに故郷里
赤貝へ還りかしとぞりいぐ何をもあるべく思されんよに隠しぬり
れば心ふまぬ思ひを懺悔の為に空えまく某元来只一個の畏父
母兄あるとその名を穂之助と呼れう親苗四郎ハ母の為に後招の義に婿
れば穂之助と継しかりれさるあるあを雅紀時より父ハ只顧某をの愛と
兄を笑顔を見せぬさるある怒をも置遣く打懲しつをくむぐくあく
れば母の心ハ休らぬ恨みつ泣つ禁ぐるに口舌せ一日も多くり紀然れども
穂之助ハ素より孝行等閑ならねば腹黒紀親に悖らぬ実母継父の隔
あく已を責く事へしく人みを誉ぬるのもかしてあるもこの年を歴て兄弟
成長りし比母ハ持病の痞重りく竟に見ぬむやくなりゆくりされば特と失ひ
袖の涙いあぐ乾ぐぬも母の中陰果し日に兄穂之助ハふかくに世を形のくひ

○久弟は家を嗣ぎ、なほこの身を隠さんと書遺して、密かに行方知れず。父は今は胸を潰して慚愧後悔甚しく、一郷四鄰を駆して日を経るまで索しかども所在は絶えて失せぬ。母と兄は死なんばかりの哀しみの中にも、なほ親の家なれば、あはれ孫の世に成長して、せめて尋思ふ親苗四郎は清勧を扶け、家へ帰りて仕を年を経るまで親の歎の傾けば、あるかなきかの命びとなれば、里まをりて幾日もあらで痛しく死なれぬ。父は忘野の沒落を見て後弟の弓太郎共侶刀野時夏が非道の刃は忽地命を隕とし、打ち冠者も逃られて加北へと走りゐるべいで先途は後ゆく稟る恩義は答んと思へば親の墓礼は親類は内の住ふ浅良井の刀自女子は倶して岩神の郷へ赴死又この森は冠者の窮厄灰は尽くし心もあるべ世はあれ人とありもぐその散りとも飲んと思ひ起ふ陸奥へ赴死し中妻ありて冠者は見参せ[illegible]し親の離言敵の軀を刺して志を致さうとの歓びは哀しとあるもかかる再度の別離で遂に慕ひく来しめを[illegible]安うぬ主は俱せで追かへさで恨さは徒笑かかるばかりも舊里へは還りかこ[illegible]とのあるこの故に兄穂之助が孝烈の志は羞ありべ一合ある田園でも阿容ことして親の迹を承嗣んの本意ぞ[illegible]でも逗留して冠者の安否を外ぐう訪ぬんとあるは東の都會ゐく諸國の道俗多く聚合り徒は日を送るは伝れど後は者人ぞ[illegible]絶えて久し兄が住方の終はあるべ[illegible]又陸奥へ赴死も一つは冠者は遭人又一つは[illegible]兄は環會とありもせんと心は占て起行べいとも苦しいなるべうと察しゆへといひけて頻は鼻をうちかくる人の誠は感激せし義邦箟姫はさこそ誰ぐう人獲る神垣の

挾牡鹿あり。三二ホ四人も人の耳を引傾けて頻に感嘆をうるを中に義邦は感涙坐に禁ずるを目皮をあぐ。通微妙記蒙二郎初め家に在て比ぶべきものなしと家の艱に忠孝顯れ雪の中に松柏の操をうるとこのあん現この弟ゆゑに彼兄あり匹夫も志を奪ふべからず望に任せ其ことは。この地に足を駐め可惜路銭を費すとも兄に遭ひその益あり吾僑の為めも絶ずゆゑにとそもかそも舊里へ帰ると決めば要記鎌倉に送らんとうるに武藏の太田の莊に赴き光仲の内室と愛えるを見姫を慰めぬ彼婦人の薄命なる親廣綱は捐らるる良人は不測の罪をゆるし若黨間中守直は先に帰還るとひとも営中の沙汰定なるを風聞紛紜たんやを愁傷さまと想像るべし。さぶらひその良人の留守ゆゑ毫そを訪ひ来ることなく面をもあたとも笠姫は女どもこれが消息をもて彼地に到らば。

豫て相識る守直あり心を尽すことなく歡びて留められん故彼処に身を寓く且見姫の資と称ぶるを夫婦の籠居は後人より遥に勝れり醫は心ゆゑ姫は歡びを尽すを向れて姫は歡びを尽すを世に類なき憂なる美の如きに傳へ慰めるあれ幸ひ人の幸ひを妾も増さひ彼方

対面せんと伺ひ間中隼人が噂して名の高しを聞きそん

言はせんと回答べ廣光ホ四人も共に感佩し安危の巷に在ながら明友の義に敢て留守をも訪せ。この忠操あべしは現蒙二郎は相応の使をも辞ずとそのつ蒙二郎は初め莞爾とうち笑ひ選はれ善役鎌倉に日を送るとも莊柄の弟に赴き冠者に見参をくるあべ何地にありと宜し定め兄穂之助に遭んとそ難ぎれば仰に従ひ給ん

七太田の莊は三十里もあり下野に在るあるして鎌倉の風聞も

彼地へ赴くべきえん陸奥を宿志を遂しも朝夷と多賀殿と内外ようして戦
柵を攻落しゆくこの両将の賜あれば越路へ始邁ぶ太田の荘へ赴くとも
思ふ荅こ志ばかりの道も捨れドかゑ。かれば主命のかゆ。私の本意も協へり坊
消息を急せもと愉く承引て遠しく退去料紙硯を借りて墨埃を吹く
あるこ侍ぶ篋姫歓びて黒磨ぶ。走書あの程義邦も亦一通を守真
贈ひ。大よ筆を深こうるかて夫婦二通の書翰を拵へ。封しい。
蒙二郎ふこれを遞与して口状を去去とあり。折もあれ迎の轎子来れり
荘柄が家隷業内し布の慢幕引絞り。出もと促せば義邦躍て身を
起して篋姫共伴は縁類ふ立出ば轎夫ふ。二挺轎子最重ふ影の土
卒立聚合て。義邦と篋姫を扶乗し。或へ廣光従忠武詮昌之ホとうの獲て。
前駈後従の隊伍正しく荘柄天神の宮とうの第宅を投く。衛長も

後者多く拾く馬上ゆうふ拍せ。みづく廢を押うるされば又下知を受く。
苗しる雑兵ハ城戸を解て守屋を毀く新関ふ。廢られ。この夕より
人の往返も常のごくふ。程ふ蒙二郎ハ恍惚として追立ふ。
離別ふ堪ず。その故主の轎子の後ふ跟て傷ふれば追遣られて。
ある邁とハ其処とも。ぬ荘柄の社頭まで。ふれば前面ハ衛長が第
門の守の繋しくそ。内へ入られ。ば又今ふ朽ちくふ。悵惘として
立在程ふ長き夏の日。常ふ。黄昏く林ふ。鴉ふ。
あくふ。ふれば今宵ハ小町の宮ふ。客居ふ宿投りの。且く逗留して。
荘柄の社ふ詣て義邦の吉異を祈く。衛長が宅地の邊を徘徊。又若宮巷路。
和田義盛の第を観く。市中の風聞を拷ふ。荘柄平太衛長ハ和田氏の嫡流
義盛の従弟。その第ハ柳営の東荘柄の前面。時の人異称て荘柄

平太と喚做す抑義盛の祖父を義明と云ふ三浦大介是なり義明の嫡子を和田太郎義宗と云ふ是則義盛の父なり義宗の季弟を和田平内義長と云ふ義長の家男八郎平太胤長なり胤長その性名を好み客を愛し大いに文藝あり武術亦世の雋傑と交ると身の樂みとせり圖らず吉見主殿を領ぜしと面目よりその歎待は意を用ひざるなく守禦の士卒を遠く坐らしむ窮屈なるに堪へず和田左衛門尉義盛は當時鎌倉宿老の功臣なり侍所の別當なりその性親戚は敦しく獻で人の善を稱へ弱を助け利の為よりは義を重んじ情に識量明敏なり決斷は疎なりされど光仲が罪戾は皆是実なる証拠なり人も亦我も亦厳命に違ふを忍び難し

罪人を執扱ふとなく東面の廂房は光仲を安措ふその所なりは彪つけ家隷をして成と云ふ某甲とは老女一人と男童二人を果らせその所要を達さ

ずその為光仲が文武の才長なるもその大功のむなしきを憐み且その子義秀を浅からざりしかば又義盛の嫡子常盛は義秀を厳聘のため使とし五月廿四日の朝未明は老黨膘越獸六郎ホ従者多く扶く且郷導の為江三郎光を相携越中國婦負郡岩神の郷民稲向判五が宿所を投く起居さて廣光は廿三日の甲夜の間は義秀は届く死義邦の書翰を受收め莊掬が私率ホ護送して和田の第へ赴く常盛は躬て對面し郷導の為四郎光仲は召籠られ光仲は召籠られ室はあり共の室はあり房の紙障又房櫳の伊与簾まで隔られ次の日越路へ赴くとて藁三郎はこれらの風聞を彼は問ひ此は少く僅は心を安くし遂は鎌倉をも立て武藏の太田へ急ぎ赴く五月廿有九日のその日も未下刻既は件の里は著く人は問ども隠れ廣綱の莊院の衛門を向上れば甲門の扉銷固く角門の些閑り時は夏の

最中なれば母屋の端の障子さえ閉籠て内も人影ありとも見えず進み入て又
ながめ列も拂ふ夏草の彼此に生茂れる樹上に高き蟬の声もかまびすしく
熱き筧の水は涸れ立ちんと欲すれば檐下に巣くる蜘蛛の網は顔を包れ
うの蠶はく退けば樹垣より促織のなくと花咲て拂ひもあへぬ蔦の二つ
三枝ながく肩に集る。あるじ紀宿禰はかまびすしく荒く守る人の心の中はいつ
かんと想像ぶる胸塞りくるもいとも鼻の音や洩る内より人の誰をと咎めく
障子を確とあくるは是則別人なれば間中隼人守直と聞と出るとぞ思ひぬ
藁二郎と面をあらためまくいふもおろかふ歓びつ又疑ふまでのすを咨れば
藁二郎は遠しく式臺とるに枝縁よりて近く声を細ゆ某は只もとうあぐと
詣まうでさぞ訝しく思れんこの種の情由あらく冠者の使に立られう。
消息も齎しまゐらせ多れども。あるはあるに端近しとぞ守直ならと

如く何ぞ狭き[illegible]且こなたへと誘へば藁二郎は草鞋を解き
片ほ畳て笠をもて被せ端折り単衣を引拂ひ[illegible]拂ふ埃を目もくれず進
流る汗を拭ひもあへず免させ給へと小冠を折めて引れて客房に赴く窓の下ふ
坐を占れば守直も對ひてをり當下藁二郎は故主夫婦の口状を述べ且見姫の
安否を咨へ叔光仲の支の趣及義邦主従の義秀の風聞高利高吉のすを
もとくこまごまと一一笑もせずその大略を説くと一遍齎しる二通の書状をとり出
さしあげれば守直はその標署をよく恭しく受捧げ義邦の贈りし物の封度を
折紙にて逐一又打逐して読果て感涙をはらはらと現冠者の懇切なるこの
文面は和主のすまで曲は載せられしうその寛厄の中にかくまで心を用ひられ
多く紀滅心只冠者のすれば和主のぞ紀心操感ずるはあるまじ。
より先へ告べ紀欲の日吾侍は栗橋まで人々は別れ帰郷く。

太田の荘の藁二郎
且見姫を訪ふ

間中ノ隼人

多賀殿の武功帰陣のよし且見姫より報まうせば歎びなさるゝ大ざわぎさて已べなるあるべれば前司殿の世をゆり捨て往方もなくなりたるひとりの娘を潜ませ給へ

もうしも像見の二種を進ぜよ姫うへ使も始果て色の変へもぞ憂て泣ぬ涙ハ神よりそぐ外ハ有まじ驟雨は胸ハ板屋の破廂あるが堪ぬ過ぬかを悔の八千代百千遍ゝ泣ぬ哭ハ哽えり咳あげて袖引被て臥ぬ

現も歎ハ理りと極樂の中より大殿よ廣綱を養ひとゝ廿年以来実の親も異なる恩愛の羈絆を断れ。ゆと惜この深き所も只孝心の切なる所以推かく

こをあるこれ去歳の冬ハ菖蒲の尼公の病とも成て世を逝ぬ今茲又ハ父ハ大殿よ捨られ給ひ此あるの中を量りて慰やまぬ有ぬを

聞近く使ゝ校枝とゝふ女子ゝ彼諫やまぬ一日二日と経ぬ鎌倉風俗ゝ多賀殿ハ云云の罪軽ゝ被れ遠ゝ在拘氏

仁田氏台命を奉り小袋坂よ出逆へゝ切心地よ捕捕りぬ吉見殿ハ云云ゝ士卒雑兵ハ

箇様ゝと報知ら有ぬ。ゝ軍役よ後ゝ彼新関より追還れ。この太田の

里人ハ紛れあるべ共ゝ且見姫ハ伺ふ大殿のゝ往方をつゝとゝ

胃のゝ雲霧ぎもあるをかゝゝ又彼凶変伝へ聞あるゝ胃潰れ魂消て

雲時ハ氣息ゝ有ぬ校枝ハ大く驚騒ぎ枕方より後方より抱て起

らゝ只管ゝ喚活ゝ声ゝ吾倍も驚ゝ走りぬ湯液を勧めゝ

勧る程よ中なくゝれゝ交ゝ有ぬ。ゝれども反ゝ枕もあげぬ物ゝ召ぬ絶ぬ涙ハ

五月雨の濕りゝ有ゝ袖朽ゝ檐の玉水音ハ絶れども果敢ゝ聞答ゝ

心の中ゝ神仏の擁護を祈りゝ痛ゝ限りもあぬ

起ぬハ多賀殿ゝ営中の沙汰ゝ細ゝを知りゝ

ゝ賦て云云と姫ゝ

ゝ陸奥より飼立ゝ栗毛の駒ゝ鞭ゝ息ゝ

つゝ也只一昼夜に彼地に到るべ打ち小袋坂の新関はきのふ城戸を毀捨て番兵退散ぬと申さば聊障なく馬を勧めて鶴岡の八幡宮に詣で多賀殿の厄難消除を黙祷して退けば既やゝ日は暮れその宵は市に宿りを投ぜ巷説をきゝ聞くに多賀殿は禁獄より出でて和田義盛ぬしに領けられて吉見殿云云とその大ごとを知るべし目今和主の報ぜれ精細類なあるべかれば彼下河邊高吉あるも逢ふ一両日逗留せば便を得るとあるべやとのゝ姫の病著も亦心ばかれば次の日馬を乗捨て帰郷せしかばあるべ留守を任せる老僕小厮は耳恒しく連累せられ婢女輩はその父母の病著などいひ某は起ぬ程に皆悉逐電しぬ程に某は僅に只是不便のるらく身の暇をもひらぶ僅に残り留るの棧杖一人のみ只是不便のるのこれども且見姫は多賀殿の禁獄より出されく云云とは鳳聞をの遷北

あるべ仕しく命ぜ美わ素より死実の罪なれば遠く釋なんさるべを相潭ぬ慰められく昨夕より面色もけるるは臥蓐に身を起して飯も些は食のみ斯人寡記折るる微も寇者なり和主をあやさへ寄さるべ大なるぬ資と況姫なるの消息を聞て件の物語をあぐ倉公華陀の療治ぬ心地清しくかせんと噫られ鈍なる要時憂を洩さんと長潭に時を移ぬ姫なんと消息を聞せるべ又相潭に長途の疲労さるもあるの足踏伸して休ぬと銀ぬ歓待して二通の書状を携くるべ仍奥ぬ起ぬを俟て稍久く守直は退散きつさるべ消息は要時も留めて言見殿の一通まで且見姫なるべ和主の口状遣るべく彼なるの趣曲は伝へまるせるべ姫なるは忽地方つぬ物のぬを果敢くぬ起ぬ只是冠者御夫婦のあふ浅なぬ恵ぬと

歓びの色を斜めにかたぶけ和主は對面してそれ彼の物語を笑ひ給へ。
病の況は乱れる髪あげもせねをいでハせんあまを饗応せよとぞ宜の夕膳も欲
かぶり風爐を焚き男のあれば。態の疎とく笑れやせんあの間に桜枝八
桃と早瓜を皿に盛るをもて蒙二郎は勧めに受けてくの箸を抗ぜ
数多くの肴のかくまでよあん骨待ハ物体や給事人達の之れ見る甲斐やも
火を打せ水を汲と使ひ更賓ぞ。よせし桜八ありくは窮屈と今あやさへの途ぞ。
あく物をたべ露ぞ。欲べあを後をを賜らるを妃小男
それども草野で育し骨ハ堅くて牛も馬も劣らぬ。二三十里の行をせ
疲労ると思ハ況秀更龍門へ退りて夕餉の支度仕らと思ひやそ弟を起し来
隔れ老實人のあろ言葉は顕れて。とり信ぬ客態は守直桜枝八爺笑て
憑況それども今本人をいで使ハ日数限ぬ逗留やハせを翌ぞ休ひ

てよと。それども聴ぬ。賞を褒げく桜枝を先は立て。庖厨のそこを赴妃る。

後輯第四十六

鎌倉の糟漬鮑
高野の年魚鮨

蒙二郎ぞ氣早行る守直ぞ制めるそも寵門の意を任用せに精情
弊しそのの資少くべ且見姫ハ。それらのすを桜枝は笑く且笑ひ且憑しく思ハ
あつは見さえひあの保養はあり。ん憂苦を忘ることあるあ。ねぞ心熱のを清う
とく次の日桜枝は結髪して蒙二郎は對面しその人表とん為は無下の田舎
現れども浮ぶるの一点もれ。現れば故主は忠信ある親の為は怨を復せ
その先顛末を守直が物ぶるは伝へ。すもあり心ざあ。くべ人は捷れ
れば吉見殿のあくとあ人は寄さ。彼は信あるの八此も亦信あり。
先方人を求るるとぞ心は誓て鎌倉の風聞を。聊慰めへ。

両三日を経る程なく有一日藁二郎に守直なる者海道なる根岸鎌倉の風聞も亦後のまゝ変ぜず僕彼処より赴くあのびくに街談衢説を定めなく知り来る四五日ゝ程身の暇を賜へとあり守直笑くられ恋そのまゝ彼は

あるべきもの姫と人あるよりまゝ彼処へ遣くあべられあもりく便宜をはつべしと姫と人はあるべしとと

そなは藁二郎と誘引立く奥より出く且見姫は云云と笑あるべく校校主の

ほとりより姫は言よく笑果てそれ歓しく相禅んとあるべくあるまゝ

つまの丈夫の人は拙られく罪なりとと笑くは第一條は家尊の大人の

ざるを害せ安ど諸せられく疑ひの深きまゝ安やをとあるべし解みん料おは

妾はあり賜し彼ん像見の扇の歌を正しく燈は立べれ彼はを求めく

あるべく丈夫は返し進らるべあとあるは幸ひのまゝそあるべれ校校を知りしとはは

入えりべば校校はやとく小膝を進めく今姫人の宜せし傳手と知べ見れ賞

妾は一個の叔母侍りそ少女ありし比より和田の御館は給使しく四十ばかるまで彼処に

侍り初は下司なる伝婢で侍りしにその心ざ精悍しく仕はあるさの年を歴しれば

漸は引のべられく守戸の局と呼れ侍り妾が里は在し程叔母も畢夫里下りしく

物はべれりるも侍りしその後家の親あるそ妾は些の由縁あるこのまゝ人流れ

来る叔ん家は侍り途いと遠くありし音耗絶く侍れども今あり叔母は

差べく彼御館は侍るとは賜るは殿いと光神を誣られく妾が叔母の主君なる和田殿

領りのひは番卒ばど隷られず一個の老女と男童ホを冊しべと狭世の風まは

違べべも継その冊の老女は叔母で侍べべも妾竊は消息しそあらん侍らは

あん像見の扇を殿へ参るべるこのまゝ心つれべば姫は

のまゝ云云とあるし試に侍べと報るを守直うあるくまは究竟のまゝ知れべ笑の

中より刀を隠し人のうろハ揃りかたし況ハ婦人より秘密を委し
おび毛を吹くとて疵を求めんこと了簡より及ひ難し且く思ひ止りなといれて姫
ハ落る涙を拭ひ申さん蒙二郎ハ後方より守直が袂をとりて事ハ
ふく執りなへバ怨ハあるべきれどさぞハ又功も有しと浅ましく僕なども助言ハ
似て烏滸がましく傷痛くおれんと且試ハ打出さん扇のうへ姑く措て梭枝の
状ぶり今宵僕ハ遣与なへ然バ明暁ハも立く鎌倉へ赴き梭枝をのく使と
稱さバ和田の第へ出入ハ。こハ究竟の便宜とよりやそのより成らぬとも此の
殿の安否をあんかてハいざと真実もくらも相潭へバ守直ハ且く按ん
莞爾と笑ひ和主の尋思大ハ有まつ尺素をとりてあらんて後回翰を
尺く又考て彼れ像見を遣れ失なんさぬ彼処ハ赴くとも人毎にあると
用ひく叔母ハあれ外人ハ太田の郷より来りなどハ必しいひ難く喻ぜ難く

心してそハ肝要のよし又その文も肝要れよく徴ると微笑バ梭枝を
羞て立んとハを守直急ハ彼と問答
もよ紛れあるべしあるべれバ商量既ハ整ハ且見姫歓ぶく文の徴ざ
梭枝ハうをハれバ物整んと遠しく部屋ハ退りうされバ梭枝ハ
且見姫の詩の遣ハその文をとりかやう写ハ土産ハ些一果添ハ一袱を甲夜の
間ハ蒙二郎ハ遣与ハれバ蒙二郎ハ暁をおそ時ハ六月の上澣翠天涼し星
月夜鎌倉をさして起ハて只管ハ急ぐ程ハ僅ハ二日半ハて若宮巷路の東ある
和田義盛の第ハ着ぬ且くその門ハ入ハて尻掛酒肆ハ立よりて飲食ハ酒客ハ
雑沓を側聞ハるハ方ざ日の噂をれども心ハかるるハ遂ハ件の第
後門ハ進ハ入ハ百五六十歩ハ歩ハ中門ハ入ハ其処ハ入れハ前面ハ
閨門ハ一枚九尺の檜戸を立その戸ハ又樞戸ハ。その前つくハ板席ハ

右遍ゝ寺屋あり番卒一人狩二人狩二人狩り件の板間の框際ゝ
土間あり母屋ゝ孫廂ゝ附くゝ大紀あり掘戸二枚あり左右へ開かる。
板席の上ゝ燕脂白粉櫛笄ゝ鬻ぐ物の本ゝ貸て世渡りゝ高麗
物彩色繒團扇ゝ鬻ぐ呉服太織の絹ゝ鬻ぐ商人ゝ所
換ゝ聚合ふ局方ゝ仏女の子共幾人か入り或ハ二の掘戸あり。
真白なる半面をあらはして潜ゝ物あり飯ゝ著く蠅のごとく商物の重掘
小葛籠のゝ立て投ぐ物を買ゝ或ハ主の使ゝ付ぐ。
上総木綿の草衣被て右ゝ萌葱ゝ太ゝ幼幾重か焼ゝ締ぐ草
書匣を携左ゝ青張の日傘を引提て遠ゝ遣もあり或ハ鹿
拷の前褌を精悍ゝ端折る女の子一俵の炭と四五束の薪をと
軽ゝ左右ゝ引提て内ゝ入るもあり又縋て擔もあり現ゝ館の

あるゝ和田左衛門尉義盛ハ鎌倉創業の功臣ゝ其地ハ信濃ゝ
相摸ゝ且侍所の別當ゝ自然ゝ華ゝ栄ゝその威福傾多ゝ
あるゝ小家ハ荒ゝ美ゝ大姓ハ荒ゝ娼ゝ況都會ゝ
田舎児ハ朱門白壁の目ゝ輝ゝ丸牆石瓮の足ゝ坦ゝ紫微玉殿ゝ入り
狩ゝ怪ゝ閨閣後堂の欄干ゝ寅城霞被の嬋娟ゝ値ハ女國麗農ゝ遊ぶ
狩ゝ疑ゝ蒙二郎ハこの光景ゝ呆ゝ且く外面ゝ立
在ゝ商人ゝハ退ゝ去り婦女輩ゝ折ゝ進ゝ呼問ハ
裡面より老ゝ執接人立ゝ来ゝ向ゝ紙ゝ裏の刺ゝ
つ受ゝ要時ゝ問ゝ裡面ゝ入ゝ又蒙二郎ハ候
と一時ゝ此度ハ色いと黒く肥脂つ付る女の子守ゝ報間ゝ
ゝ彼局ゝ使ゝ炊妾ゝ蒙二郎ゝ武藏ゝ使ゝ

そなたさそ候まびあひけめこそおんかへしぞのと去ぬとつゆ藁二郎わ
遠く祇包を受れば女子ハ又一枚の守屋のゆ実を取らつて云云といひ知
まるとあるゆ果て奮入りぬ。二の門より走り出れば日影ハ落て暑片よ。
下晡よりうれども既ゆ回翰をゆくれば只何とく樂くあり急だの
せまるゆ直ゆ往柄ゆ起ちく天神を拜まり又退ちく小町ゆ曩に宿
ぬ客店ゆ起ちく今宵をあゆ曉を程吉見冠者を後の風聞を扮問ゆ
異なるもなくゆ聊心を安くつ。その曉方ゆ宿をちく北を望てきるゆ
井水の涸を六月の暑も初伏の土用前ゆ炎暑ハ焼くぶ如くれども藁二郎ハ
途ゆ慈を直走ゆたくこの日ハ武蔵の渋谷ゆ宿り翌立ハ早旦て起ち
宿のあゆゆ契りうゆ夜中より腹痛く邪熱酷しれば苦悩ゆ堪ぬ當下
藁二郎ハ倩ゆ頃の暑うるまれ還るも途を急ぐと

ゆとあくゆふハ持さ十六里を汗汲流してゆまよれば心を霍乱ゆ
ん噫便ゆと焦燥ども病痾ゆ勝ぬ所ゆのれば次の日ハ逗留して薬を
求て服ゆまゆく吐瀉せより熱邪ハ稍清れども氣力衰へく長途を走る
べくもあゆ孫ば又その次の日ハ保養ゆ第三日ゆて瘧果うかれば猶豫ゆ
うぶそその日午の比又ゆ渋谷の宿をたち去く亦復途を急ぐ次の日未下刻
太田の郷ゆ至り著て且見姫主後ハかくべくとハ思ひもよぬ藁二郎ゆ
日の約束ゆ後ゆ一日二日と俟へ兄ぬそのゆ噂して障れるまゆ
彼処ゆ抑留せれ欣市中の徧室ゆ求ゆれば索ゆ下ハあくゆ回翰の遲
日を送りし欣ゆあんかやあんとひとして慰ゆ胸休らぬ旦暮
ゆ藁二郎ハ恙ゆ守直ゆ立くつゆ来ゆ問ゆと問ゆ
含笑ゆ頷ぬく首尾ゆそよれと答る間ゆ按技ハ盥をとりて水汲流を馳走

態まものく逆異を祝し〻藁二郎ハ遠しく汗を拭ひ足を洗ふく桜枝守戸
回翰ある袱包を遞与よ九人桜枝ハ多く歓びく途の疲労のあるべきれども
姫又の侍とり人多りく彼処のすの趣を口親おうーあるべ也と他すあくいへバ
あるを為ぬく〻うて奥よ起ち和田義盛の茅の光景富貴繁華の為
体又彼回翰をとりあるる痒の趣かるる霍乱〻く心ありしも渋谷の郷よ
三日逗留せ〻すあ曲よ報しバ且見姫ハ〻も〻く且歓び且労ひ桜枝に
畏の封を解し〻文を讀し〻ゆ〻よ立野紙をとも累〻く走書ちうえ
老華ありども美しく初ハ桜枝が差ありを祝しとゆ異ありを報絶を久し情を
述く訪れを歓びすあり扶次の條よそあるハ近ろ多賀殿の九由縁の方
ざあよ俗事あるとと狭ようと云云と相殫れ殆秘ゆ也ぐくそのあるを也う
嫌ハ幸ひよ彼君の冊あそ隷られバ九臂近く侍ふ〻ゆ外ハ男の童二人を

侍守禦の兵をどハ置れぬあぐ〻。ゆそ彼君の功高ゆよ似げすくあるくよ
罪かれるあひ〻を惜そ憐ゆ此の殿のおろまそあれかれば
障りあべくもあ〻ぐを侍すあるともうけのうえ九ゆ人よあ〻ともゆうハ
あ〻ぐをぐこれのすを〻〻を桜枝刀祢守戸の局と署ふ又その禾ゆ
物ふく〻ふ〻れく歓び侍あるとうの〻頃のすあれバそのくさ。
器うの料あぐよ九。細小やあるく折梶両箇を酬とやうも被き〻く
ふ〻ふその一箇を美麗あ乾果子あ一箇ハ糟漬の鮑あるを痒既ゆ
かくのごとくあるれバ且見姫の歓びハ〻〻守直桜枝ハ蒙二郎を右左より扇九
立て皆是和主の働九とそ。もく誉て己ざれバ蒙二郎も亦歓びく翌又鎌
倉へ邁んと議ゆるよ〻かりを翌又遣らんハむぐんよ似くあるぐ〻特よ
病後のすあれバ一両日を過しそと且見姫もそれを制め守直も侵ざりを。

藁三郎ハ頻りに進めて寸善尺魔と俗にも云へり疲労を厭ふく時後れぬば障
りもあらんかと云消息もその餘の物も今より整へ置翌も未明に起べし。
渋谷老ハ世を易へと只管勧めて退けば桜枝ハ窓を焚つけて物食せんと共侶ふ
庖厨のくるを起妃り守直これを目送りて一個ハ忠あり一個ハ義あり。
くるる男女あり其とてもこのまを心りあくるひ事をも輙く整ひ曼賀慶の
勲功と姫うへの貞操を神明佛陀憐れそ冥助の眼尾を回らひしめの
あるべーされば奴婢ホハ此度の祟を怕れて逐電せーあるもあり身の暇をそ
あるべ一人残り留りたる桜枝が忠心微りせばいかにそこの叔母を相憚敵とも
あらんや況藁三郎が老実なる人のなる謨るを毎信あるべとのを非是偽大慶の
仁義の餘徳なべーと稱賛されば且見姫ハ感涙坐を禁めるて人の誠を歎ぶ。
身の薄命を哀び不樂と潸然と泣ひとひ久しく床間なる料紙とをひ

引すて夫を猝諾の夏野の鹿の筆も夏毛の長文ハ紀貫之の紙を書集く
憂やるすべ契りしかも仇と移ばの人をうくの麻衣のあるかれくたるの冷涙を増
せ硯の水も墨ハ乾る児の脚机走らぬ筆に時移るまで稍一通と写果く像見の
扇なる共を封し篭の程を桜枝も亦叔母へ贈る尺素写めて来れば且見姫ハこれ
彼とひとるとうくハ重封皮して表箋ハ桜枝がもしく云云と署べしとく硯を
そやこへ推向めバ桜枝ハ筆とるぶ紀く写果てそ侘は一封をのて拉んとあつ忽
地を跪紀これのこあてハ物足らぬ贈めハ何をぞと問れて姫ハ沈吟し乾篭居の
折あるを憖を物を進せハ郎のあるをざしにあるじかし世を憚の関もあれば亦
おをおくのをさばれそやこの叔母前へいそのすあるべハ便宜所移へ曩ホ
壓せし鯀の鮓ハその要意をんそやこも豫てあるもんこの里盡処ある川ハ流
速くて水清るされば何人ら唱初ん彼処を新玉川とぞいふある流を添やる

人家の字を或ハ川口とも唱へ高野とも又ハ谷ゝ。これらのかるゞ父君もさうしかりあひしを夏毎の土用よハ彼高野なる里人ホゞ新玉川を掘せ鱠を進らせ給ふ。今茲ハ家尊の大人もかまくらに拘れて出ずとかの蓄たる忘れぬ里人ホゞ些の鱠を饋りしかば飯鮨とて壓せ一昨日のかの鱠の鮨ハ二十日あまりを経くのちは熟ゝハ常のかれども此度の鮨ハ早漬にして五六日そこゝ守戸の局へ送り物ハ彼鮨かくて何ゝあんといふしく桜枝ハ膝揭進らかるゝあで出ゝ力を用ひ給ひ冥加なあり妾が叔母とまれかくまれ新玉川掘せ鱠ハ鱠ハ光仲を豫てもせ給ふ鱠の鮨ハ最大好きなめれば細小かる器ハ蔵やく此度進らせ給ふの餘れ一巻を守戸へ賜ふ。ゝかるの物商せしそ障り侍ら他ハ勧やる心操ハ伴ふして推辞べくもあるれがさいとて聽て別紙ハ云云と書添へば桜枝ハ清き磁器をこれ彼と擇ゝ洗ひ拭ひく捕る鱠を移しをゝ尽ゝまれば且見姫ハ副翰を件の器ゝ共ハ前ゝ紫の服紗ハ包ゝ封ハ程ハ桜枝父餘の器ハ鱠を移ゝ推包む主従の饋物を外函ハ秘ハ又包ゝ尽ゝこの日ハ暮ハ暮ハ夜ゝ且見姫ハ藁二郎ゝ近つけて守戸へ饋ゝ一巻を桜枝ゝ遣ゝ与ゝ給ふ饋物の鮨ハ一点も残ハ彼処へ遣てのまを云云と伝へば藁二郎ハ藁の墨次日暁ハ饋物を背負ゝ守直ハ辞ゝ別れ又鎌倉へと起ゝ勇あれば先度より疾走りしの日夫口の渡ゝ前面の人家ゝ宿次の日も又暁より遠ゝく旅宿ゝ只管ハ走る程ハ未牌ハ巷路ハ来ハ案内知ゝれば且くも躊躇ハ和田義盛の第ハ後ハ進ゝ入ゝ閨門ハ赴くハ彼桓戸のかとゝ執接人ハ蒔の袴を著ゝ

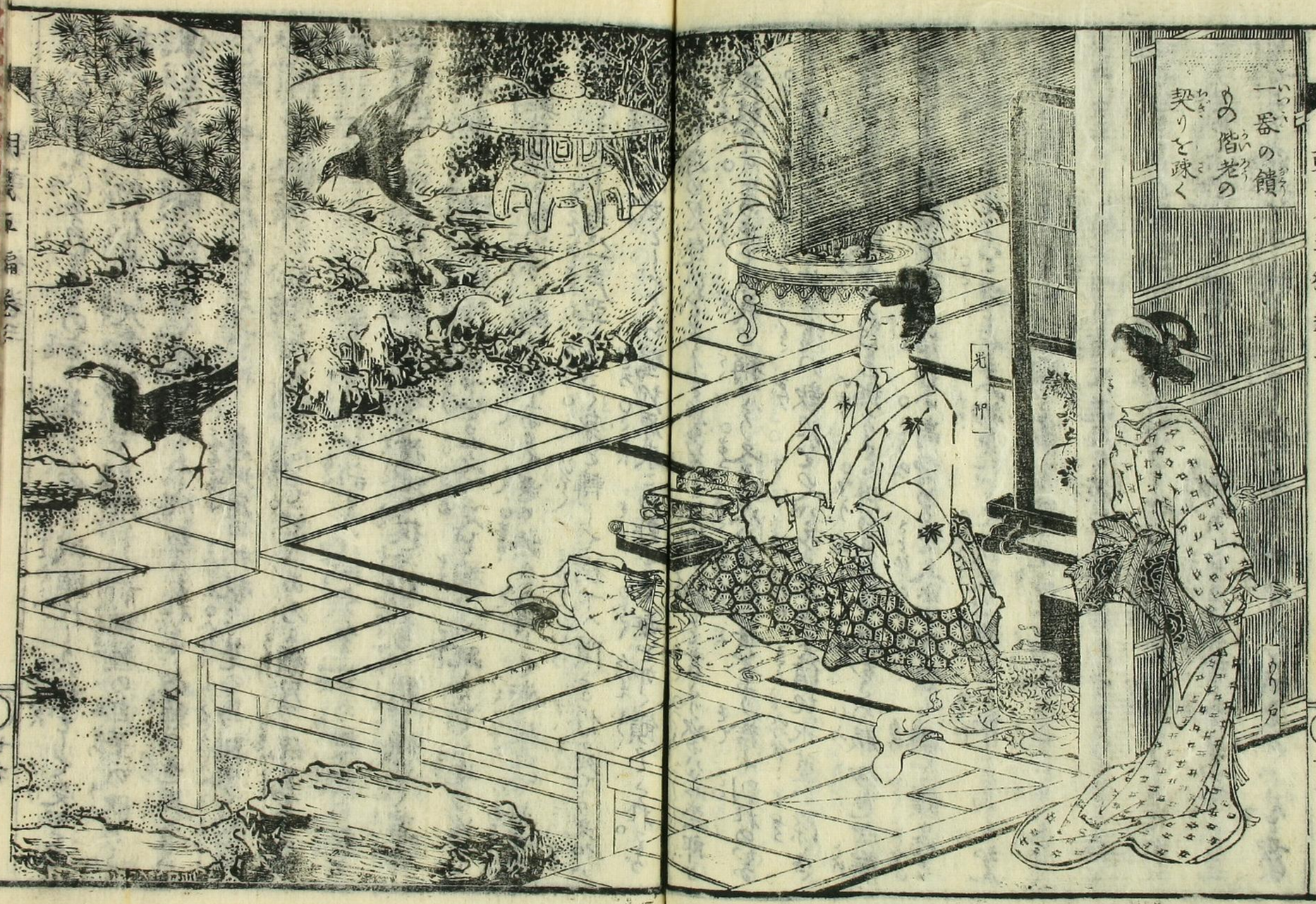
の只一個出てなり曩日見る老人かねど商人ども来聚ぶばほとり近く走り進み
執接人なるも對ひ卒かなる物まうん僕ハ使のものし守戸の局へこの一包をあらと
ひとしきりなれどく人信かなで届めひねと頼をなくく携る祇包を恭しくさしあれ
執接人ハ応といへくすして剥とんをかくハ讀ざうん訝しげ面色にて憂時もも
ねとび被て包を引提く奥へ入りねかをしくハ蒙二郎ハ疲労れし足を休めそ程か
尻を掛られども守戸が回翰をいまどねば心有繫まもつて人の去今る毎日件の
回書とをて来る狡をそ尻を外して迎見れども有るべき良しと対へやるる候と二時ばか
ゆく件の執接人ハて来る祇包をその侭ハ蒙二郎か返してやるる和主ハいづれの里ら
き。
来てどれの御館とやるるやんあるこの女中ハ多ろる中ハ打戸と與せぬハあれど守戸の
局といふやー名の違へるあやあんとそ彼ハ咨嗟ハ問へどもかさ名の婦女子あり訪て
あハあるるとこの一包ハ封の侭ハ返るとそれ去ねといとせば蒙二郎ハこれと

て云云と頼ぶそしそのすをまづ告て渠ハこが姪なるうるう回翰せ一通を見るく又
いかるも渠復使をしく太田の郷なる姫ハ人のあ消息を寄せ打ち打ち四下に
守る人なれば屈まるるるよんんをハしてあんんを賜れてを真実しげハ且見
姫の消息と眼紗包をさしあるるを光仲執ぶ氣色もなく寔ハ女子の浅ろれるる
ばいけなく譜せられく罪蒙りしと知りなくく世をも人をも憚らぬる所れをまるを
久且見おいとまれかあれ守直これを知りくばく禁むぬ兒なるふさもあるくく狡
あるるるくやハ局且見姫ハ使るく桜枝ぶ為ハ叔母なると狡亦是不思議の
宿縁く輙く渠ハ相譚れくこれいの執接せるくるるよ浅るるぬ忠心ぞと
歓ぶべきまぶあれども光仲ハこの期ハ及ぶく女子ハあるるをまさしく容翰の
贈投せと人ハいくとあるばば死しをも義を雪やくあるこの侭ハ返してと
他なるくいるをやあんどん理りまるるるるるるるる情人なるばとを好色とも

いはんや親に許され君にも知られし夫婦送に安否を問ふを誰か正からずと
いふもの侍らん姥ハそのことのみならず尉殿に義盛をいつはりしハわが彼殿の惻隠なれ
知君も知らせ給ひけめどもやがての人ハ知るとも主従一致のうへなれバいかでか他所へ
洩れ侍らん況て父君に捨られたくその佚の君の安からぬを遥に想像らせ玉ふ奥
さまの御こゝろを推量りていと痛まし悍き武士といはれども心つよからぬぞかし
まづ消息をかへして一筆なりともまゐらせ給へかし今ハ詐欺りかねと
彼方ざまに姥のみ恨られやせん枉て此儀を聴給へとて岩齬棚なる料紙硯を
やがて取出しておもむる老女の誡に光仲ハ已ことを得ず黙頭ハ守らかに
もすれバ姥も局へ退りて梭枝へ回翰写させん急せ給へと真実なく潜めつれぞ
退出るかくて光仲ハ且見姫の消息を封推断くはしたくて廣綱の像見つゝ
扇を中に包みて憂くハくを書つゞし筆に涙の迹なきる第一條の

扇ゆゑ官府の御ん疑ひをまつはし給ひなんと祈り給へと書たり次ハ蕎麦二郎が
梭枝がすその恋をの義を称へたり又その次ハ廣綱の世を去り捨し別れのかな
しき恭と貞とを一色紙に畫ぬ歎きを見バ岩井に清き水茎の深き
ゆゑをあらはす汲えてあまり弥増る件の尺素を巻おさめ服紗包を解
被けくその副翰を取て讀むに高野なる里人ホが今茲も鮴を饋り侍り
ぬを飯鮓にせしを嗜せ給へかしと記されども梭枝が頻りに勧るゝまに
笑ひに備へ侍りとていと短く書たりける光仲ハ高野の里江君をや思ふ
ごゝろもなつかしく新玉川の清き流れも深きハ妹があたりなりとて巻の益を
取てえたりその鮓の飯の色常にかはりしすゝめれバ眉うち顰めて又更
今の世の人心夫婦の親しきも憑みがたし初られ守戸が云々と告し名原来この
老女によりて心をさし挟みて且見が消息など偽りて試るにやあらんと案

一器の饋り物 偕老の契りを疎く



それハ田新せどもそれどもその言の葉まことくも誠顕れしくば疑ひて受きあ
投げくそれハ紛れもあれ尺素ハ且見ぐも蹟ぎく前司殿の自筆の歌あく
像見の扇を添えれいよく疑ふべくもあらばあれどもこの鮮の色異なハ
いと怪しきをあらもとえくを折くを忽地庭の松枝より一隻の烏翱来て栖宿
餌欲げに数鳴くり光仲これを遥より向上てそうあるを領ひて硯筥なる刀子を
遠くく取らんとすれ有繋ぎ寸鉄を許さびバ細やうなる筆の軸ぶ鮮の鮮を
突串ひくく三四ッあるこの巻石の邊へ撲地と投与れバ烏ハ頭を傾けく要時
えくやくく飄さと翔降て四下をえくり足を揃へく跳るごとく近つ来く
件の鮮を横さまに咬く銜く樹上ぶて還り頻りに嘴して衝摧ひて忽地啖
盡ひとんえし烏ハ一声亞と鳴く身を轉して樹下へ墮る俄に死でう光仲ハ
この形迹ぶ愕然とえくを驚ひ原来この鮮をそ毒をかく饋ひそれこそ

眼力の賢ひハ婦の為ぶ害せられん嗚呼危ひ危ひ現七ぶ子ぶ
生とも婦人あるを緩くそうの鄙言ハそれもあるを察るぶ且見姫ハ月
あるの留守の程密夫ぶ心惑くそれを鬱悒ぶあるかくハ不測の罪蒙りて
今ぶこの鎌倉ぶ篭措れども飽ぶ遂ぶあるくの毒をそれを害て後やをく
計りぶ疑ひ新ぶ這奴憎ぶしくと心の中ぶ凡弾ひて疾視詰る飯
鮮ハ途ぶ人ぶそうそれくあるふひと夢ぶもあるふひを哀れる且て光仲ハ
怒を歓ぶく膝立直ぶ噫それ愚痴ぶ富貴ぶハ他人も聚り貪戯ぶハ親
族離れそれハ存亡不定る罪人とあるぶより妻子ぶも疎くぶ今ぶ来ぶ
縦且見ぐ奸夫を知るとも身ハ拘れてあるぶ在り憎しとそれとも何とそれぶ且見ぐ
不義の罪重くとも前司殿の恩義ハ高うそれ辛く脱れて命ぶ恙なくもあるバ
舊の井平たんのぶ夫婦の縁ぶも是あるぶ今あり離別の状を取りて彼怒

歡笑喜ぶ形と肚裏に云ひ入つて硯の海に立つや筆の水滴子心つくしゆうく
くの泡とのあぶ又揚流に墨より薄き妹伏の中を裂いうゝえの真葛野の
北山遠き紙屋爺の料紙はあれど且見姫の副翰の裏引久しく愛時
楽しくさめくと書で贈れる三行半は像見の扇巻箒く器の鞘も舊の
〳〵固く封じて氣ゆく樹枝のかゝより暮初る庭面をおとり眺てゆかう
程は守戸の局ハ潛やゝふぬゝび来ていふあんかしハあるし行灯暮ぬ程ふと
急れ帰りとのよ光仲頷はく局の臧心黙止くくく終は回書を遣せども
再ては要かれ度このゆ人はおれば局ハ〳〵和田殿の名を立らてとも
あぶ。あろはゑと警ゆく件の包を取られば守戸ハゆく歡びくあい
あいんとはるはゝ次の間のゝふ是然と足音はるをえくまばれ秉燭の
童に守戸ハさぬ面色しく掩ふよ餘り服紗物を袖は隠しく遠しくあのが

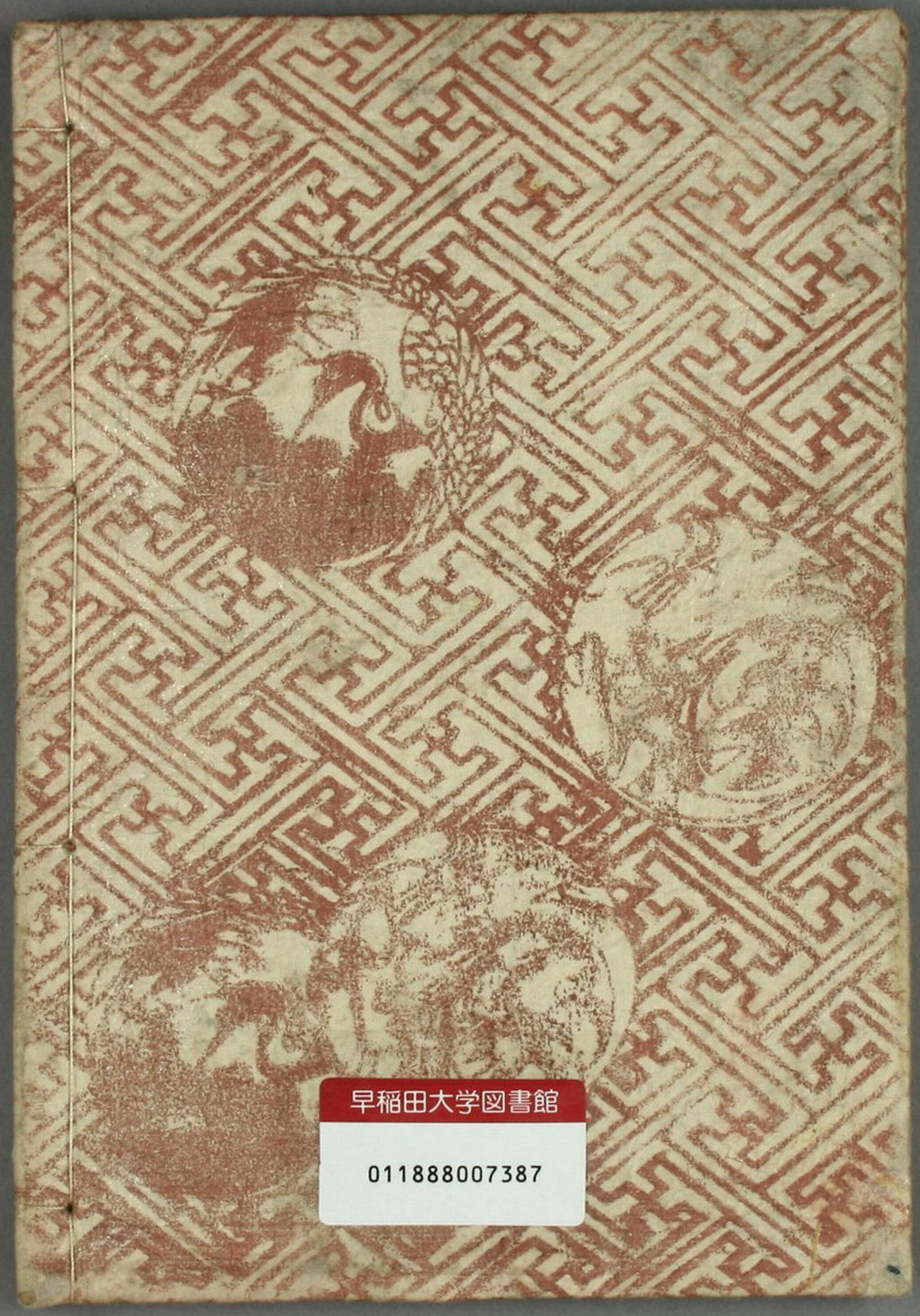
局へ退りるを烏雪渦の倚る所推くその端をあん原ふこの一條の
錯誤ハ春鶯鳴梟その果を換く落花流水いまゞこれを知らぬ豪二郎ハ
秘密の書札を時政の第ゆ遣れ遂は執接人は遍与せふふ折戸とゆ侍児
あり桜枝が包は麗る刺は假名あそとり戸のつがひの紀りくと書ゆうとり戸と
をり戸とその文字似れば執接人ハ誤認て躯て折戸は届けを折戸も亦疎忽ゆく。
封を断包を披ゆく後は中あくるゆ方へ贈られ中ハあぶと曉りて悔しく思ど
彼あきに彼は薄ひ此は告てほゝく用ゆ果なるを牧の方信はんとゝれとゝるふ
ゝを疑べくもあゝぬ且見姫主徒より光仲とその冊ゆ老女守戸へ贈られ又廣個の
像見へとゝのふ扇又巻箒く二器の鞘を添ゆう牧の方ハ熟見ゝ。紀物獲ゆと
歡びく竊は良人時政は云ゝと報ていふ彼井平の光仲奴ハ辛く獄舎を出
れてもあ拘く傳ふふゝの妻よりまゝくと物を贈ゆハ大膽ゆ〳〵今これとゝ

紙しめぐ妻とゆとともいぞう脱る。彼奴ホ夫婦のこゝハ侍ゝ年来娼く愛多ゝ。
要拘人義盛之ゝ。これとゝ罪とし落さバ稍目上の贅脱く心地ゝ多ゝ。
これ商ゝとさしあるまバ時政ハ鼻紙盤ゝ眼鏡を把く件々を見つゝ見く尋
思しゝ。ゝの澄据ありとゆとも。悪くゝ流罪のめぐゝもその妻子の消息ハ
許さく例もあり。譬バ今光仲ハその類ゝあゝ。創業ゝ補佐臣
将軍の外戚ゝ婦人の密書を偷見く云云と計らゝ諸老臣ゝ拔せく。
況重忠能負ホハ光仲を具負めくゝ子義時の肚裏も今さゝ揺り
かさし渠りちバ必禁め又義盛ハ故老の大紳その族黨多ゝしバ聊科を
負ゝるとも一朝ゝハ仕かさし就くれ謀ありこれを知ゝ法をゝ芸文を
以ゝ憎しとゆ光仲を今宵の中ゝ殺ゝ。その謀ハ箇様くと耳を
引ゝとゝ示せバ牧の方感服しく歓ゝと大ゝ彩ゝ且見姫の副翰ゝ。

その一器の鮓の中へゝ酷烈ゝ毒を加えくゝよく搔糝ゝらく舊のごとく
服紗ゝ包ゝ又折戸ゝ謬て断折ゝ封紙ゝ似つゝ白紙ゝ。その尺素ゝ封
扇ゝ巻篭ゝ拔偽筆ゝよくゝゝめゝの標署ゝ写ゝゝ彷彿ゝ。ゝれを
真ゝゝゝゝ贋ゝゝゝゝ内外の重封皮ゝ。初ゝ異ゝゝく
一時ゝゝゝ全く修復果ゝ折戸ゝ機密ハゝゝ氣
ゝ召ゝく汝ゝ愁ゝ傷痛ゝゝ。措れゝ苦心ゝ
これゝゝ舊のごくゝん。かれバこれとゝ使ゝ云云といゝこれを
返せゝ。ゝれゝこの封ゝ拔ゝゝゝ。曖氣ゝ。ゝゝ使ゝ
鈍く受ゝゝく去ゝバ又知らせゝ。己ゝ伎倆ゝ恩ゝ被く真実
ゝ分付れバ折戸ハゝゝ歓ゝん。ゝく応く要時ゝ措ゝ。ゝ件の
一包ゝ引提て退ゝく執接人ゝ云云といゝく藁二郎ゝ返せく牧の方ゝ

彼使が異様なく受てもて去りしと折戸が報ふ欽びて又時政告ふるしばらくして
あるを舌を吐く畳笑ひ点頭る時政夫婦の奸計ハ既よりかくの如くなれども昌義ハ
離山のあるを長唐櫃四箇を光仲を罪ハ陥せ。その本人ハいまだ知らしめず看官
奈何い拷るべし。されバ又藁三郎ハ彼時只義盛の轉第せしのみなるそのの
舊第へ移りしのハ時政ありを知らず又且見姫の饋物ハ鰤の鮓ありをもて。
こゞ愁を後悔されども包ム封ム舊のごとくて異ありべくもあらざれバ遂ハ不覚ハ
欺れく再これを携て今巷路ありて義盛の第へとて赴ありされ亦光仲の眼力。
凡庸よりあるべきも猜し試くその害を避れども是よりしてその疑ひ只見姫
又ハ係ふり憐むべし薄命の貞婦徒ハ寃を抱て憂苦を堪ふ田ありくん欽畢竟
藁三郎太田の宿所へかへり来て又甚麼ありを説話あるそハ次の巻ハ解分るべしん。

朝夷巡嶋記全傳第五編巻之三終



早稲田大学図書館
011888007387